

文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施

【調査研究の評価軸及び評価指標等】

(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究

①有形文化財（美術工芸品、建造物）及び伝統的建造物群に関する調査研究 【自己点検評価：A】

本項について5年度は対象となる6件の調査研究の年度評価は「A」3件、「B」3件であり、美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等に大きく寄与したことから、全体としてAと評価した。

評価軸：我が国の美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等に寄与しているか。	
成果	<p>【東文研】（処理番号 2111Eア～2111Eエ）</p> <p>「文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究」（2111Eア）を実施することで、セインズベリー日本藝術研究所に主任研究員を4ヶ月派遣して日本美術の情報発信と研究交流を行うことができ、美術工芸品の価値形成の多様性の究明に寄与した。「日本東洋美術史の資料学的研究」等（2111Eイ）を実施することで、韓国からの美術史研究者招へいを含む日本東洋の美術工芸に関する研究発表をほぼ毎月行うことができ、歴史・文化の源流の究明に寄与することができた。「近・現代美術に関する調査研究と資料集成（2111Eウ）」を実施することで、岸田劉生作品の光学調査を実施し、日本近代絵画の多様性の究明に寄与することができた。「美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開（2111Eエ）」を実施することで、和泉市久保惣美術館の作品の光学調査を行い、歴史・文化の源流の究明に寄与することができた。</p> <p>【奈文研】（処理番号 2113F）</p> <p>①「近畿を中心とする古寺社等所蔵の歴史資料等に関する調査研究（2113F）」を実施することで、</p> <ul style="list-style-type: none"> i) 当麻寺の膨大な古経典の概要を明かにした。その主体は当麻寺一切経であり、当麻寺一切経は院政期から鎌倉時代にかけて盛んに書写事業を行っていること、一方で、奈良時代から江戸時代に及ぶ経典が存在することなど美術工芸品の典籍についての新たな知見を得た。 ii) 当麻寺の本堂・曼荼羅堂の中近世銘文の調査で、堂舎に記された新たな書跡を見だし、前近代における信仰・巡礼の様相を明らかにするとともに、建造物の使用法を考える手がかりを得た。 iii) 吉野山関係の個人蔵の歴史資料に関する調査研究で、新出資料を紹介し、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を構成する金峯山寺・吉野山の歴史の詳細な復元を進めた。 <p>これらにより、我が国の美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等に寄与することができた。</p>
評価軸：有形文化財の保存修復等に寄与しているか。	
成果	<p>【奈文研】（処理番号 2112F）</p> <p>①「歴史的建造物および伝統的建造物群の保存・修復・活用の実践的研究（2112F）」を実施することで、</p> <ul style="list-style-type: none"> i) 奈良県内の社寺建築に関するリスト作成や、松江市における伝統的建造物群保存対策調査を行い、対象地域における文化財保存行政に資する基礎資料を蓄積し、建造物の実態解明を進めた。 <p>これらにより、各自治体の未指定文化財の具体的な件数や現状を把握することができ、今後の文化財保護の方向性を検討することが可能となったことから、有形文化財の保存修復等に寄与することができた。</p>

②無形文化財，無形民俗文化財等に関する調査研究

【自己点検評価：A】

本項について5年度は対象となる3件の調査研究の年度評価は「A」2件、「B」1件で、無形文化財、無形民俗文化財等の伝承・公開に係る基盤の形成に大きく寄与したことから、全体としてAと評価した。

評価軸：無形文化財，無形民俗文化財等の伝承・公開に係る基盤の形成に寄与しているか。	
成果	<p>【東文研】(処理番号 2121E～2123E)</p> <p>「重要無形民俗文化財の保存・活用に資する調査研究等、無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化」等(2121E、2122E)、及び「無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集等(2113E)」を実施することで、楽器(箏、尺八等)の製作修理技術および原材料生産技術(ヨシ等)の調査研究、工芸技術に関するアーカイブ(東京藝術大学所蔵中村勝馬資料等)の調査研究、無形民俗文化財研究協議会「民具を継承する—安易な廃棄を防ぐために」の開催、宮菌節・平家・落語(正本芝居噺)等の映像記録作成、韓国国立無形遺産院との研究交流、ユネスコ無形文化遺産保護条約政府間委員会への出席(ボツワナ)等の成果を得て、無形の文化財の保護・活用に寄与することができた。</p>

③記念物，文化的景観，埋蔵文化財に関する調査研究

【自己点検評価：A】

本項について5年度は対象となる16件の調査研究の年度評価は「S」2件、「A」8件、「B」6件であるが、平城宮跡・藤原宮跡の継続的な発掘調査において、古代国家の形成過程や社会生活等の解明に寄与する大きな成果をあげていることや、水中文化遺産の調査法の確立に大きく寄与する発展性のある成果を上げたことなどから、全体としてAと評価した。

評価軸：記念物の保存・活用に寄与しているか。	
成果	<p>【奈文研】(処理番号 2131Fア、2131Fイ)</p> <p>①「我が国の記念物に関する調査研究(遺跡整備等)(2131Fア)」を実施することで、</p> <ul style="list-style-type: none"> i) 平城宮跡をフィールドに、繁茂したカヤの屋根材への利用、大極門の赤米献上隊の舞台としての活用、兵部省遺構表示の現況把握と修繕といった宮跡管理や活用に関する実践的研究を推進し、全国の遺跡の共通課題である持続可能な遺跡のマネジメントについて、整備後の遺跡に生育した植物資源や、復元建物及び遺構表示施設の維持管理・活用の在り方に関する課題を抽出することができた。 ii) 新たに社会科学の専門家を交えた研究会を実施し、これまでの遺跡整備・活用の効果を現代的な観点で検証するとともに、今後の研究テーマを展望することができた。 iii) 世界遺産に関わる国際的な視点によって、「整備」という包括的な言葉の下に説明されてきた遺跡現地の保存と活用の在り方の具体について、認識を深めることができた。 <p>②「我が国の記念物に関する調査研究(庭園)(2131Fイ)」を実施することで、</p> <ul style="list-style-type: none"> i) 全国の庭園の調査・保存管理・活用に資する技術的な知見を蓄積し、修理方法等の体系化に向けた整理を進めることができた。 ii) 記念物ガラス乾板などの所蔵資料の公開活用に向けて、整理・デジタル化を進めるとともに、『法華寺庭園保存活用計画』策定時の調査成果を一般向けの冊子として作成し、配布することができた。 <p>これらにより、記念物の保存・活用に寄与することができた。</p>
評価軸：古代国家の形成過程や社会生活等の解明に寄与しているか。	
成果	<p>【奈文研】(処理番号 2132Fイ-1、2132Fア-3)</p> <p>①「平城宮・京出土遺物・遺構の調査・研究(2132Fイ-1)」を実施することで、</p> <ul style="list-style-type: none"> i) 西大寺・西隆寺の遺跡に対する評価を改めて検討し、平城宮跡資料館の特別展覧会や奈文研の公開講演

	<p>会、YouTube 動画、イベント等で市民・社会に遺跡の重要性と歴史的意義をわかりやすく伝え、遺跡の保存活用に努めた。</p> <p>ii) 平城京左京三条一坊一・二・八坪の発掘調査報告、平城宮、法華寺旧境内、西大寺旧境内の発掘報告書、興福寺東金堂院の発掘調査概報、古代瓦研究X II 鬼瓦、第 26 回古代官衙・集落研究会報告書 古代集落の構造と変遷 3 の報告書等を刊行し、遺跡・遺物の研究成果を公表することで、それらの重要性を示し、保存活用へ多大な貢献をした。</p> <p>②「藤原宮大極殿院地区・藤原京跡の発掘調査(2132F 7-3)」を実施することで、</p> <p>i) 藤原宮大極殿に瓦を供給した橿原市日高山瓦窯を 2021 年の物理探査の結果なども踏まえて、計画的に調査し、藤原宮造営期の瓦窯生産において新旧の技術が併用されていた状況を明らかにするとともに、奈良県及び橿原市と協議を行い、遺跡の保存・活用に向けて方針を定めることができた。</p> <p>ii) 明日香村石神遺跡で、1981 年の第 1 次調査地を再発掘し、7 世紀前半における石神遺跡の区画東南隅を新たに検出するなど、現在作成中の『石神遺跡発掘調査報告 I』に記載すべき重要な情報を得ることができた。</p> <p>これらにより、古代国家の形成過程や社会生活等の解明に寄与することができた。</p>
<p>評価軸：文化的景観に関する保存・活用並びに研究の進展に寄与しているか。</p>	
<p>成果</p>	<p>【奈文研】(処理番号 2133F)</p> <p>「文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究(2133F)」を実施することで、</p> <p>i) スギ林業に関わる複数の地域の比較研究を行い、その成果を『山の風景史—育成林業に関わる文化的景観報告書』としてまとめ、公開できた。</p> <p>ii) 研究集会を開催し、文化的景観の保護行政担当者、研究者などと、林業景観に関する課題を実践的、総合的に検討することができた。</p> <p>iii) 日本各地の文化的景観の情報収集、課題の検討を行い、新たに平城宮跡周辺地域での調査研究を開始することができた。</p> <p>これらにより、文化的景観の保存・活用並びに研究の進展に寄与することができた。</p>
<p>評価軸：埋蔵文化財に関する研究の深化に寄与しているか。</p>	
<p>成果</p>	<p>【奈文研】(処理番号 2134F 7)</p> <p>「全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究(2134F 7)」を実施することで、</p> <p>i) 行政から一般に至るまでの多様な活動に資する埋蔵文化財に関する基本情報を発信することができた。</p> <p>ii) 埋蔵文化財の発掘調査成果から抽出した地質・過去の災害情報を収録した歴史災害痕跡データベースの本格公開を開始し、発掘調査の成果を防災・減災にも役立たせるための研究基盤を確立することができた。</p> <p>これらにより、埋蔵文化財に関する研究の深化に寄与することができた。</p>
<p>評価軸：水中文化遺産に関する調査研究に寄与しているか。</p>	
<p>成果</p>	<p>【奈文研】(処理番号 2135F)</p> <p>「水中文化遺産に関する調査研究(2135F)」を実施することで、</p> <p>文化庁より受託した「水中遺跡保護体制の整備充実に関する調査研究事業(第 3 期)」を推進し、</p> <p>i) 水中遺跡の発掘調査手法を高度化することができた。</p> <p>ii) より効果的な沈没船の現地保存法を究明することができた。</p>

	iii)海揚り品の博物館環境下での劣化要因を解明することができた。 これらにより、水中文化遺産に関する調査研究に寄与することができた。
--	--

モニタリング指標：

		第4期中期期間平均	3年度	4年度	5年度	6年度	7年度
論文等数	東文研	13.2	10	17	17		
	奈文研	57.8	68	88	57		
	計	71.0	78	105	74		
報告書等の 刊行数	東文研	6.8	5	6	6		
	奈文研	13.6	12	8	16		
	計	20.4	17	14	22		

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究

①文化財の調査手法に関する研究開発

【自己点検評価：A】

本項について5年度は対象となる6件の調査研究の年度評価は「A」4件、「B」2件であり、科学技術を的確に応用し、文化財の調査手法の正確性、効率性等の向上に高く寄与することができたことから、全体としてAと評価した。

評価軸：科学技術を的確に応用し、文化財の調査手法の正確性、効率性等の向上に寄与しているか。

成果

【東文研】(処理番号 2211E)

「文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究」等を実施することで、『扇面法華経—光学調査報告書 カラー写真編』ほか5件の報告書を刊行して最先端の画像形成技術を応用した独創的な研究成果が公開できたほか、黒田記念館所蔵の黒田清輝油彩画作品のカラー高精細画像、赤外線画像、蛍光画像を紹介するウェブコンテンツを制作して専門性の高い研究資料として広く公開することができ、我が国の美術工芸品や建造物の価値形成の多様性の究明に寄与することができた。また、これまで本格的な画像資料がなかった「国宝扇面法華経」について様々な調査撮影技術を駆使してカラー写真、近紫外線写真・蛍光写真・近赤外線写真を報告書の形で成果公開することにより、歴史・文化の源流の究明に寄与することができた。

また、「文化財の材質・構造・状態調査に関する研究」を実施することで、これまでに分析方法・分析条件の最適化を行ったハイパースペクトルカメラ等の可搬型装置を用いて絵画や染織品等の彩色材料の現地調査を複数個所で実施し、我が国の美術工芸品等の価値形成の多様性の究明に寄与することができた。

【奈文研】(処理番号 2212F、2213F、2214F)

①「埋蔵文化財の探査・計測方法の研究開発(2212F)」を実施することで、

- i) 三次元計測では、SfM-MVS技術の簡便な撮影自動化の考案と公開、効率的な計測手法の開発を進め、文化財等担当者研修などにより、それらの成果を全国の地方公共団体職員等へ普及することができた。
- ii) 遺跡探査では、GNSSやLiDARと連動した地中レーダー探査を実践し、データ取得の迅速化、解析方法の洗練、ボリュームレンダリングなど地中の異常部の可視化、に関する方法の研究開発を進めた。
- iii) 地質情報の活用では、発掘調査での地質情報調査を実践し、現地及び剥ぎ取り資料からの地質情報の簡便な取得方法、発掘や探査等による被災痕跡や断層の確認方法、未調査地における堆積状況の推定方法、を洗練することができ、それらの成果をデータベースに反映する基礎技術を確立した。

②「年輪年代学研究(2213F)」を実施することで、

- I) 平城宮・京跡出土品は、遺構ごとの考古学的な年代観と年輪年代が非常に整合することを示すことができた。
- ii) 輪王寺護法天堂の保存修理にともなう調査により、史料の少ない同堂の履歴理解に資する年代情報を提供したほか、近世～中世における年輪データを拡充することができた。
- iii) 栗塚古墳出土埴輪のハケメの照合に年輪年代学的同一材推定の手法を応用し、新たなハケメ痕跡のグループを見出すことができ、年輪年代学の年代測定をこえた応用についても成果を得ることができた。

③「動植物遺存体の分析方法の研究開発(2214F)」を実施することで、

- i) 明日香村西橋遺跡出土カツオ遺存体分析や正倉院宝物の動物由来素材(牙甲角)の調査により、古代における海産物流通や宝物の材質や製作技法等に関する新知見を得ることができた。
- ii) 骨角製品の研究に必要なとされるニホンジカやウシの角や骨の切断標本の製作、所蔵リュウキュウイノシシ標本のリスト化、主要貝類の貸出標本の準備等を通じ、所蔵資料の公開活用を進めることができた。

	<p>iii) 考古学や歴史学だけでなく、動物学や畜産学など多様な分野への波及が期待される、遺跡出土資料のDNAや同位体分析等の共同研究を始めることができた。</p> <p>これらにより、科学技術を的確に応用し、文化財の調査手法の正確性、効率性等の向上に寄与することができた。</p>
--	--

②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究

【自己点検評価：B】

本項について5年度は対象となる14件の調査研究の年度評価は「A」4件、「B」10件であり、計画どおり、科学技術を的確に応用し、文化財の保存・修復の質的向上に寄与できたことから、全体としてBと評価した。

評価軸：科学技術を的確に応用し、文化財の保存・修復の質的向上に寄与しているか。

成果	<p>【東文研】(処理番号 2221E～2227E)</p> <p>文化財修復材料と伝統技術に関する調査研究を実施することで、酵素を利用した修復技法や鉄媒染染色品への処置方法の研究(2225E)、また海外講師招聘による新規修復技法の研修や科学基礎知識の研修など(2225E)を行い、我が国の美術工芸品や建造物の価値形成の多様性の究明に寄与することができた。また、伝統材料・技法に関する複合的調査研究の事業を実施することで、今後の生産確保が非常に難しいとされる材料や道具について、科学的な評価と安全な保存方法の検討を行った。特に今年度は紙の原材料のノリウツギやネリ等及び漆・天然染料に関する科学分析と現地調査(2226E)を実施し、歴史・文化の源流や展開の究明に寄与することができた。</p> <p>【奈文研】(処理番号 2228F、2229F、2230F、2231Fア-1、2231Fア-2)</p> <p>①「考古遺物の保存処理法に関する調査研究(2228F)」を実施することで、</p> <p>考古遺物の保存手法の開発に資する基礎的なデータを着実に蓄積した。これにより、</p> <p>i) 発掘後の劣化特性に応じて効率的に鉄製品を保存し、環境保全にも配慮した新たな保存管理システムの構築研究を推進できた。</p> <p>ii) 従来に比べて処理に要する期間を大幅に短縮する木製品の保存処理の画期的な新手法を考案できた。</p> <p>iii) 金属胎・木胎漆器の保存処理・管理手法の基礎研究を遂行し、着実に成果を蓄積することができた。</p> <p>②「遺構の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究(2229F)」を実施することで、</p> <p>i) 遺跡の主たる劣化要因：塩析出による剥離・粉状化、乾湿繰り返しによる層状剥離、凍結破砕による小片化についての継続的な基礎研究、フィールド調査で多くの成果をあげることができた。</p> <p>ii) 得られた調査研究成果を国内学会、開催ホストを務めた国際会議に論文投稿、研究発表できた。</p> <p>③「考古遺物を中心とした文化財の材質調査に関する調査研究(2230F)」を実施することで、</p> <p>i) 新旧の分析機器や分析手法による結果の整合性に関する調査を進め、蓄積された材質分析データや同位体比分析データの継続利用に道筋をつけることができた。</p> <p>ii) 碧玉製玉類の使用石材について、蛍光X線分析とX線回折分析を併用した新たな産地推定法の可能性を提示できた。</p> <p>iii) 赤外線イメージング技術を用いたガラス材質やガラスの着色剤の判別法、蛍光X線イメージングに加えて赤外領域の波長を使用したマルチスペクトルイメージング技術、LA-ICP-MS等の新たな手法や技術の調査研究、導入を進め、分析の正確性・精度・効率性の向上に寄与できた。</p> <p>iv) これまでの実践をもとに、出土品の蛍光X線分析についてのガイドラインを提示することができた。</p> <p>④「高松塚古墳の壁画等の調査及び保存・活用に関する技術的な協力(2231Fア-1)」を実施することで、</p>
----	---

	<p>i) 壁画に用いられた色材の同定に関し、彩色箇所 X 線回折分析調査を行い、必要なデータを取得できた。</p> <p>ii) ハイパースペクトルカメラによる調査に先立ち、装置を固定する治具の安全確認を行い、装置の設置条件を具体化し、調査実施に万全を期すことができた。</p> <p>iii) 壁画の三次元解析技術を用いたモニタリングについて、実地調査に向けて研究を進めることができた。</p> <p>iv) 新施設への壁画の輸送方法について、振動や荷重のシミュレーションを行い、基礎データを得られた。</p> <p>v) 類似古墳への調査を継続的に実施し、古墳壁画の保存・活用に資するデータを得ることができた。</p> <p>⑤ 「キトラ古墳の壁画等の調査及び保存・活用に関する技術的な協力(231Fア-2)」を実施することで、</p> <p>i) 模擬漆喰を調査・測定し、壁画を安定に保存する温熱環境を検討するための熱水分移動解析に必要な水分移動性状及び機械特性の物性を得ることができた。</p> <p>ii) 3D 点群処理ソフトウェアを用いた三次元モデルの差分解析を行い、SfM/MVS（三次元解析技術）を用いた壁画の状態を効率的にモニタリングする手法の研究開発を進めることができた。</p> <p>iii) キトラ古墳とその壁画の類似例である熊本・大分両県所在の装飾古墳を対象とした保存環境調査の協力及び実測調査を実施し、キトラ古墳壁画の保存・活用に必要なデータを得ることができた。</p> <p>これらにより、科学技術を的確に応用し、文化財の調査手法の正確性、効率性等の向上に寄与した。</p>
--	---

モニタリング指標：

		第4期中期期間平均	3年度	4年度	5年度	6年度	7年度
論文等数	東文研	17.4	24	27	30		
	奈文研	40.2	65	39	65		
	計	57.6	89	66	95		
報告書等の 刊行数	東文研	6.4	3	8	5		
	奈文研	1.0	0	1	1		
	計	7.4	3	9	6		

(3) 文化遺産保護に関する国際協働

①文化遺産保護に関する国際協働の総合的な推進

【自己点検評価：B】

本項について5年度は対象となる9件の年度評価は「A」2件、「B」7件であり、計画どおり、文化遺産国際協力を推進するとともに、国際協力推進体制について中核的な役割を担うことができたことから、全体としてBと評価した。

評価軸：文化遺産国際協力を推進するとともに、国際協力推進体制について中核的な役割を担っているか。	
成果	<p>【東文研】(処理番号 2311E、2312Eア〜イ、2313Eア、2314E)</p> <p>国際情勢や予算面等での困難を抱えつつも、外部資金の活用も含めて海外での協力活動をさらに本格化させるとともに、海外からの来訪研究員の受入や、シンポジウムや研究会等の対面開催等を他機関との連携も含め積極的に実施した。特に、4年ぶりに開催した ICCROM との共催による紙文化財保存修復国際研修には応募が殺到した(2311E)ほか、カンボジアでの石造建築遺産修復事業報告書の刊行を着実に完了する(2312Eアイ)などの成果を挙げる事ができた。また新たな取り組みとして、若年層を対象とする海外考古学イベントを開催するなど、文化遺産国際協力を多面的に推進することができた(2312Eアイ)。引き続き、国内外機関および専門家との連携ネットワークを充実しつつ、より効率的かつ効果的に、国際協力推進体制についての中核的な役割を担うことができた。</p>

	<p>【奈文研】 (処理番号 2312Fア(ア)、2313Fイ)</p> <p>「アジア地域等の文化遺産に関する調査研究及び保護協力事業(2312Fア(ア))」を実施することで、</p> <p>i) ウクライナ科学アカデミー考古学研究所、サマルカンド考古学研究所などの海外主要機関と学術交流及び協力に関する覚書を交わすなど、文化遺産国際協力を推進することができた。特に前者については、戦災被害の続く状況で文化財収蔵施設や管理方法をどのように最適化していくのかについて、オンラインでの協議のほか、実際に専門家3名を招聘しての出土遺物・人骨の保管に関する研修・シンポジウム・対面協議を通じ、現地と日本の専門家間の協力関係や議論を深化させることができた。</p> <p>ii) アンコール遺跡群における修復事業、日本ウズベキスタン青年技術革新センターとの共同事業の計画協議、ACCUの実施する事業への支援などを行い、それら事業を進展することができた。</p> <p>これらにより、文化遺産国際協力を推進するとともに、国際協力推進体制について中核的な役割を担うことができた。</p>
--	--

②アジア太平洋地域の無形文化遺産保護に関する調査研究

【自己点検評価：B】

本項について5年度は対象となる1件の年度評価は「B」1件であり、計画どおり、アジア太平洋地域の無形文化遺産の保護に向けた調査研究等の国際協力を推進することができたことから、全体としてBと評価した。

評価軸：アジア太平洋地域の無形文化遺産の保護に向けた調査研究等の国際協力を推進しているか。	
成果	<p>以下の5件の調査研究事業を通じて、国際協力を推進することができた(2320G)。</p> <p>海外研究機関との連携による研究情報の持続的な収集((1)①)では、今年度も引き続き連携機関との協働を継続し、中央アジア・小島嶼開発途上国の双方について、情報収集を本格化することができた。この結果、これまでIRCI研究データベースにわずかにしか収録されていなかった中央アジアと小島嶼開発途上国に関する多数の情報を収集でき、協力関係も強化された。研究フォーラム事業((1)③)では無形文化遺産保護条約採択20周年に合わせたオンラインセミナーを開催した。SNSを活用した広報を取り入れたことで、新たなネットワークの構築にもつながった。国際的にも関心の高い課題への取り組みとして、無形文化遺産保護と災害リスクマネジメント((1)②)及び新型コロナウイルス感染症の影響((3))に関する調査研究事業では、それぞれ総括となる国際会議・ワークショップを開催し、事業成果について事例研究を踏まえた議論を行い、今後の発展性についても展望することができた。その報告書は、今後の取り組みにつながる基礎的研究の蓄積として活用が期待される。無形文化遺産の持続可能な開発への貢献に関する研究((2))では、無形・有形文化遺産の統合的保護を視野に入れた事例研究を進めており、本格的調査を実施した。今後6年度にかけての活動継続と成果の取りまとめが期待される。以上、5年度に企画した全ての事業活動については順調に国際協力活動が進んでおり、アジア太平洋地域の無形文化遺産保護のための国際協力を十分に推進することができた。</p>

モニタリング指標：

		第4期中期期間平均	3年度	4年度	5年度	6年度	7年度
諸外国の研究機関等との共同研究等の実施件数	東文研	0.4	2	4	4		
	奈文研	2.2	1	1	6		
	計	2.6	3	5	10		
国際協力事業の実施件数	IRCI	4.6	5	5	5		